

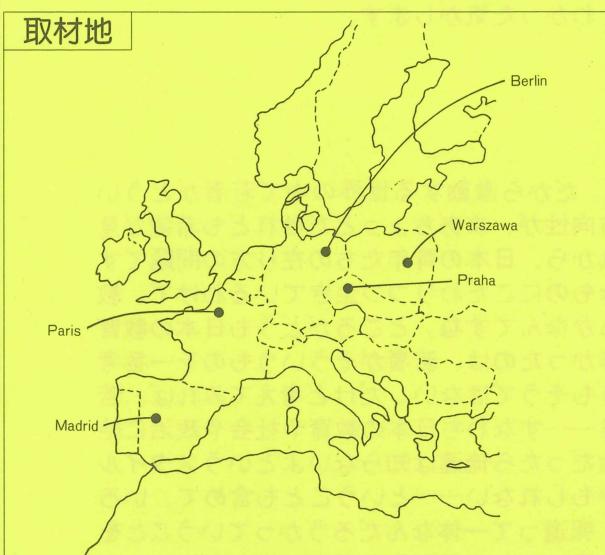
サテライト文化講演会 第一弾

牧野 剛・鎌田 慧

「激動のヨーロッパを駆ける」

机にむかっての受験勉強だけでは、いつまでたっても視野が拡がりはしない。自分をとりまく環境や社会状況を知ることによって、過去の歴史を探ることによって、各地を訪れることによって発見できることが多々あるのではなかろうか。現代社会の様々な領域について積極的に考え、とりくんで新たな自己発見をしてみませんか。

取材地



5月29日(水) 17:00~18:30

講師：牧野 剛 共同取材：鎌田 慧
会場は、各校舎サテライト教室

牧野 剛：(河合塾国語科講師)

著書：「予備校にあう」「的中現代文」他。

鎌田 慧：(フリーランスライター)

著書：「自動車絶望工場」「教育工場の子どもたち」他多数。

昨年「反骨」で新田次郎賞を受賞。

現在、私たちをとりまく世界は、歴史的な一大転換期にきている。一昨年は、東西ドイツ統一にはじまり、昨年はソ連の混乱深刻化ということで西側接近が一段と強まり東欧諸国ではあらゆる変化、混乱がおきている。最近ではついに戦争が起こってしまった。しかし、こうした状況は、日常的にマスコミを通じてある一部分のみ、しかも一方的な情報としてしか目にすることができない。

そこでヨーロッパ各地を実際に訪れ、高校生、大学生の考え方、想い、意見などナマの声を聞き出し、TVなどでは報道されていない様々な真実を伝えます。

- 教科書はどうかわったの？
- 今までの生活と比べて一番かわったことは何？
- 将来はどうなると思う？
- EC統合にむけて何を考えますか？



ベルリン：第一上級学校



プラハ・アラブスカ高校

河合サテライトネットワーク

《旅を終えて》

Kamata:

二週間、牧野さんといろんな人にあえたと思います。大学教授から研究者から、それから大学生、高校生にあってかなり突っ込んだところが聞けたと思います。そういう意味で二週間、充実した教育の旅だったと思います。一番感じたのは、国の違いによって生徒たちの希望というのは違うんですが、つまり日本の若者を振り返って見るわけですね。日本の若者というのを思い浮かべてオーバーラップさせながら見ているのですけれども、日本がやはりどうしても井の中の蛙というふうで、何もないような感じがします。個々にみれば受験戦争があるわけだし、就職があるし、企業内社会での競争があるし、そういう面ではきびしい状況に置かれていますけど、ただ、他の国みたいに国全体がかわって、その中で生徒たちが自分たちの未来を見ていくというそういう厳しさがない。それでどちらが幸せかというとそれは別問題なんだけども、日本の場合はそういう意味じゃあ激動もないし、きわめて安逸な生活をしているというのがよくわかった気がします。

Makino:

一つ一つの話がやはり現実性を帯びて緊張感があった。だから激動する世界の中で若者がどういうふうに考えているのか、教育をどうするのかという方向性が、まあちょっとだけでも希望が見えないことも含めて見えたという感じはしました。それから、日本の青年たちの在り方の問題ですけれども、どの国もやはり国家とか世界の体制みたいなものにこだわりつつ生きているわけで、教育ってその問題に一番深く関わっていることは明らかなんですね。ところがどうも日本の教育とか日本の青年はそれに関わっていない。で、非常に辛かったのは、若者がそういうものを一番考えるはずだという発言が相次いたのに対し、日本はどうもそうではない。だけど考えてみれば、若者が一番敏感だから日本ではそういう態度を取っている——すなわち日本の教育や社会や政治に絶望しているという姿、あるいはもっというと、今の政治だったら俺達は知らないよというスタイルを取っているとしたら、ああいうスタイルが本当なのかもしれない——ということも含めて、いろんなことを考えさせられました。それから、もう一つ、報道って一体なんだろうかっていうことを考えた。僕らだって取材されたら本音の部分と格好よく言ってしまう部分とがあって、取材されたたくさん的人が格好よく嘘っぽちを言ったとは思わないけれど、それでも取材されてしまうとどこかで何か顔を変えてしまうような部分がちょっとだけ見えたような気がします。いずれにしてもわりと面白い旅だったと僕は思いました。

サテライト文化講演会第二弾(予定)

歴 史 7月9日(火) 17:00~18:30

吉野ヶ里と魏志倭人伝

(森 浩一 同志社大学文学部教授)
(司会:日本史料専任講師 石川晶康)